

論文

否定辞と共起する **already** に関する語用論的考察 (1)

水本孝二

(日本大学)

1. はじめに

いわゆる学校文法では、**already** は通常肯定文で用い、疑問文、否定文では **yet** を用いるのが標準的な用法である。ただし、「意外さや驚き」を表す場合には、疑問文や否定文(しばしば、付加疑問を伴う)にも現れるとされる(『ジーニアス』)。(2)

(01) *Are my shoes dry already?* (え、僕の靴もう乾いちゃったの?(予測よりも早く乾いた、という気持ち))

(02) *He hasn't come already, has he?* (まさかもう彼が来たのではないでしょうね(予測よりも早く来た、という気持ち))

『ジーニアス』

しかし「意外さや驚き」を表さない否定文の文脈で用いられる **already** が存在する(下線は水本による。以下同様)：

(03) "I don't want to be bleeding fair," snapped Frost. "I'm trying to save the life of a missing schoolgirl, assuming the bastards haven't already done to her what they did to Debbie Clark—but she says there's not enough flaming evidence. Do we let a kid die just because there's not enough bleeding evidence?"

Wingfield (2008: 437)

(04) I did consider myself lucky. I had tried to keep a cool head all the time I was in Angelique's parlor, but now I found that I was shaking. It was only just hitting me how close I had come to death or a fate worse than it. I was sorely tempted to give it all up and go back to the Lower East Side, where I felt safe. How could I possibly uncover any facts that the police hadn't already uncovered?

Bowen (2001: 131)

否定辞と共起するこのような **already** の意味を、否定辞の作用域、文の含意、前提などの語用論的観点から検討する。

2. 否定辞の作用域

文中に否定辞がある場合、その否定の及ぶ範囲を否定の「作用域」と呼ぶ。否定辞の作用域は一様ではなく、統語上似たような位置に否定辞があっても、その否定域が同じとは限らない。否定の作用域の諸相を以下で観察することとする。

2.1. 文否定と構成素否定

次の例の二重否定に関する振る舞いの相違を検討する。

- (05)a: I don't have any money.
 b: ×I don't have no money. ⁽³⁾
- (06)a: No news is good news.
 b: No news is not good news.

久野・高見(2007: 1-5)

(05a)では「私がお金をもっている」ということはない→私はお金をもっていない」という意味であるから、この場合否定辞の not は [I have any money]全体を否定している（今後否定の及ぶ範囲（＝作用域）を[]で示す）。このような否定辞の作用域が文全体に及ぶ時にその否定は文否定と呼ぶ。また(05b)のように文否定の文をさらに否定すると、「私がお金をもっている」ということはない」ということはない」という錯乱した内容となり、不適格な文となる⁽⁴⁾。一方(06a)の否定辞の no を「よい便りであるような便りは」ない（No [news is good news]）というように解釈すれば、この no は文否定であるが、当該の文はむしろ「便りがないことはよい便りである」（No[news] is good news）と解釈した方が意味をなす。すなわちこの場合の no は文全体を否定しておらず、最初の“news”のみを否定している。このように否定辞の作用域が文全体ではなく、当該の文を構成する一部の要素にとどまる場合を構成素否定と呼ぶ。構成素否定の場合は、文否定と異なり(06b)のように更に否定辞で否定することができる。ふたつの否定辞の作用域が異なっているからである。「便りがないことはよい便り」ではない（Not [no [news] is good news]）この場合、no は news のみを作用域とする構成素否定であり、not は文全体を作用域とする文否定である。

次の例は付加疑問文に関して振る舞いが異なっている。

- (07)a: He would kick me under no circumstances, would he / ×wouldn't he?
 b: He would kick me for no reason, ×would he / wouldn't he?

久野・高見(2007: 7-12)

(07a)は「彼は私をどんな状況でも蹴ったりは」しないであろう（No [he would kick me under any circumstances]）という意味であるから、否定辞 no の作用域は文全体に及ぶ文否定である。すなわち(07a)は否定文である。一方(07b)は「彼は私を理由もなく蹴るであろう」（He would kick me for no [reason]）という意味であり、否定辞 no の作用域は

reason だけであるので、構成素否定であり、結局 (07b)は全体としては肯定文である。このことが付加疑問文を加えた場合の振る舞いの違いとなって現れているのである。否定文である(07a)には同じ否定の付加疑問を付けることは出来ない。また肯定文である(07b)に同じ肯定の付加疑問を付けることは出来ないのである。また(07b)は構成素否定であるので、(06b)と同様に否定辞 **not** を更に加えることが可能である。(06b)と同様ふたつの否定辞の作用域が異なっているからである。

(08)He would not kick me for no reason.

彼は理由もなく私を蹴ったりしないであろう。

Not [he would kick me for no [reason]].

(07)に見らえるとおおり、否定辞が統語上同じような位置にあっても、その作用域が同じとは限らないのである

2.2. 語順、音調、数量詞、焦点等による作用域の変化

前の章で文否定と構成素否定による否定の作用域の違いを見た。本章では、それ以外の要因による作用域の違いを概観する。なお以下の(09)から(18)までの例文は、**Quirk et al. (1985: 788-790)**に負っている。

通常、否定辞が文中にある時、それ以降の文の要素は否定の作用域に入る。副詞が否定辞の後ろにある場合にはその副詞は作用域に含まれるが、否定辞の前にある場合には作用域に含まれない。したがって語順の違いが作用域の違いに、ひいては意味の違いに反映される。

(09)a: She didn't *definitely* speak to him.

= It's not definite that she spoke to him.

She not [definitely speak to him].

彼女が彼に話しかけたかは定かでない。

b: She *definitely* didn't speak to him.

= It's definite that she didn't speak to him.

She definitely not [speak to him].

彼女が彼に話しかけなかったのは明らかだ。

音調によっても作用域が異なる場合がある。

(10)I wasn't listening all the time.

この文を **listening** を下降上昇調、**time** を下降調で発音した場合(11a)と **time** のみを下降上昇調で発音した場合(11b)では否定辞の作用域が異なる。

(11)a: I wasn't Listening all the TIME.

= For the whole time, I wasn't listening.

I not [was listening] all the time.

私は一貫して聞いていなかった。

b: I wasn't listening all the TIME.

= It is not true that I was listening all the time.

I not [was listening all the time].

私はずっと聞いていたわけではなかった。

使用される数量詞の違いが作用域の違いに反映されることがある。

(12)a: I didn't listen to *some* of the speakers.

= There were some of the speakers that I didn't listen to.

I not [listened] to some of the speakers.

私が聞かなかった講演者が何人かいる。

b: I didn't listen to *any* of the speakers.

= There were not any speakers that I listened to.

I not [listened to any of the speakers].

私は誰の講演も聞かなかった。

文のどの構成要素に焦点を当てるかで、作用域に違いが出る場合がある。

(13) I didn't take Joan to swim in the pool today.

(14)a: I didn't [take Joan] to swim in the pool today but I took Mary.

b: I didn't [take Joan to swim] in the pool today but I took her just to see it.

c: I didn't [take Joan to swim in the pool] today but I took her to the seaside.

それぞれ何に焦点が当たっているかによって、否定辞の作用域は異なっている。(14a)「ジョンでなくてメアリーを連れて行った」の否定の作用域は“take Joan”であり、以下同様に(14b)「泳ぎに連れていったのではなくて単に泳ぎを見せるために」では作用域は“take Joan to swim”であり、(14c)「プールではなくて海岸へ連れて行った」では作用域は“take Joan to swim in the pool”となる等何に焦点が当たっているかで作用域は異なっている。

また次のように作用域が文脈によって変化する場合もある。

(15) I didn't leave home because I was afraid of my father.

この文は文脈によっては次の2つの解釈が可能であり、それぞれ否定辞の作用域が異なっている。

(16)a: Because I was afraid of my father, I didn't leave home.

I not [left home] because I was afraid of my father.

父親が怖かったので家から出て行かなかった。

b: I left home, but it wasn't because I was afraid of my father.

I left home not [because I was afraid of my father].

私が家を出て行ったのは父親が怖かったからではない。

次も同様の例である。

(17) She didn't come to see him when he asked.

(18)a: When he asked, she didn't come to see him.

She not [come to see him] when he asked.

彼が頼んだ時には彼女は彼に会いに来なかった。

b: She came to see him, but not at the time he asked her to come to see him.

She came to see him not [when he asked].

彼女は彼に会いに来たが、それは彼が頼んだ時ではなかった。

以上様々な要因により否定辞の作用域が異なることを見た。

3. 考察

3.1. 先行研究とその検討

not already に直接言及した文献は見いだせなかったがその一方、多くの文献は疑問文と共起した already を論じているので、それを挙げる⁽⁵⁾。

(19) The difference between *already* and *yet* in questions is that *already* expects an affirmative answer whereas *yet* leaves open whether the answer is negative or positive.

CGEL (1985: 581)

(20) Consider the following situation. A parent may ask his or her child either

Have you done your homework *already*?

or

Have you done your homework *yet*?

The question with *already* suggests that the parent expects a positive answer but perhaps is surprised because he or she did not expect completion that early. The question with *yet* is more neutral, or it may be used to signal that the parent does not expect the homework to be finished but wants to make the child feel as though it should be.

GB (1999: 125)

上で観察した、多くの議論に共通していることは、疑問文(否定疑問文を含む)内で **already** を使用した場合には、話者は何らかの「予見 (expectation)」を持っているということである。一方 **yet** を使用した場合には、そのような、あらかじめ想定された予見はなく、中立的、**open-ended** であるということである(以下の①)。**already** の持つこの予見にはふたつの相反するものがある。聞き手が既に当該行為を行っていることを想定した場合(「もう~してるよね」)(以下の②)と、聞き手がいまだ当該行為を行っていないことを想定していて、その想定がくつがえされる場合(「え、もう~しちゃったの」)(以下の③)である。図示すればおおむね以下のようなようになる(例文は **Swan (2005: 558)** に負っている)。

Yet → no expectation

① Have you met Professor Hawkins yet?

→ positive ② Have you already met Professor Hawkins?

Already → expectation

→ negative ③ Is my coat dry already? That was quick!

①の場合では話し手は聞き手が **Professor Hawkins** に会ったことがあるのかないかについては何の予見も持っていない。どちらの可能性もありうるという中立的、**open-ended** な態度である。つまり①への返答として **Yes** のこともあるだろうし、**No** のこともある、と①の話し手は想定しているわけである。しかし②と③の場合はそうではない。②では [meet Professor Hawkins] という出来事は既に完了しているとの予見のもとに話し手は質問しているのである。つまり肯定の答えを予測している場合である。一方、③では、話し手は [my coat be dry] という出来事の完了を知らないで質問している。「コートの乾燥」という事態はいまだ生じていないとの予見に基づいて質問しているのである。この後者の場合が『ジーニアス』等で記述のあった、**already** が「意外さ」や「驚き」を表す文脈で用いられる場合である。筆者が尋ねた母語話者の一人、**Mr. Wood** の次のコメントも **already** には何らかの予見が存在することを裏付けている。以下では **any** と **some** との対比が **yet** と **already** の対比にそれぞれ対応しているとの考察が展開されている。

(21) Maybe it is similar to asking, “do you want anything to eat?” versus “Do you want something to eat?” In the former, there is no expectation regarding how the listener will answer. In the latter, however, there is a suspicion that the answer will be yes. Like “already”, “something” isn’t usually used for questions and negatives, but it is in this case.

この **Mr. Wood** の直観は **Bolinger** のそれと完全に一致している。**Bolinger** も以下のように述べている。

(22) Didn’t you publish some poetry back in 1916?

= Isn’t it true that you publish some poetry back in 1916?

Didn’t you publish any poetry back in 1916?

= Is it true that you didn’t publish any poetry back in 1916.

The first is *conductive*: the speaker already holds the belief, and an affirmative answer is expected. The second is *non-conductive*: it expects yes or no equally.

Bolinger (1977: 24)

以上の考察で、*already* を用いた場合には予見が存在することが明らかになった。それでは否定文中の *already* はどうであろうか。筆者が尋ねた母語話者の一人、Mr. Power の次のコメントに注目したい（斜字体は水本による）。

(23) Perhaps you might say:

“We could have lunch together if you haven’t eaten *yet*?

at noon, but at, say, 2 p.m., we might say:

“We could have lunch together if you haven’t *already* eaten.”

昼の時点では、常識や世間知に照らし合わせて人が昼食を済ませている可能性もあるし、まだ済ませていない可能性も両方が等しくあるので、その時には 中立的で、*open-ended* である、*yet* が用いられる。一方、午後2時の段階では多くの人が昼食を既に済ませているとの「予見」が成り立つはずである。そのような場合には、「既に済ませているとは思いますが、もしまだそうでなければ」という気持ちで *already* を用いるというわけである。疑問文中の *already* と同様に否定文中の *already* にも何らかの「予見」を持つ場合に用いられると言う、同様のことが言いうるわけである。

この「既に済ませた」という予見が成り立つということは、別の母語話者の指摘とも一致する。(25)のコメントは Mr. Chilton に(24)の例を示した後の見解である。

(24) “So your father financed your trip. How?” (speaker A)

“What do you mean?” (speaker B)

“How did he finance it? Cash? Check?”

“He got me the ticket, some travellers’ checks and a supplementary card on his American Express Gold Account. You can check the record, if you haven’t already?”

Robinson (1994: 141)

(25) I believe that “already” is used here to differentiate between an action completed and an action that may be continued, which would be implied if “yet” were used.

(24)では speaker B (以後 B) はある事件が起きた時に国外に旅行に出ていると主張している。それに対して speaker A (=刑事、以後 A) が B に、旅行の費用の出どころを尋ねている。B は父親から出してもらったと言いき、父親のクレジットカードから子カードを作ってもらいそのカードも使ったから、子カードの使用記録を調べれば当該期間中に自分が国外

にいたことがわかるはずだと主張する。その際に、“if you haven’t already” と付け加える。これはもちろん “if you haven’t (checked the record) already” のことである。この場合、もし “if you haven’t yet” と言えば、B は A が自分のカードの使用記録を調べ終えたのかまだ終えてないのかに関する予見は持っていない。調べ終えているかもしれないし、そうでないかもしれないという中立的な発言となる。一方 “if you haven’t *already*” の場合では調査は既に完了しているとの予見をもって B が、「自分としては、調査は完了していると考えるが、もし既に終わっているのであれば、「記録を調べてもよい (“you can check the records”)。」と主張していることになる、というわけである。実際 B のところに A という刑事が会いに来て、いろいろ職務質問をしているという事実があるのであるから、B は「自分に会いに来る前に、自分に関してすでに種々調査したであろう」との予見を持つことは至極当然である。Mr. Chilton の言葉を使えば、already は “an action completed” であり、yet は “an action that may be continued” である。

3.2. 否定辞の作用域の違いについて：「可能性(possibility)」を表す may vs. can の場合

ところで「可能性」を表す may と can の否定文では否定辞 not の作用域が異なっていることはよく知られた事実である。たとえば、“Mary may not be serious.” と “Mary cannot be serious.” の2文を「法(modality)」と「命題(proposition)」とに分離して分析するとそのことが明らかとなる。

(26)a: Mary may not be serious

[It is possible] [that Mary is not serious.]
 modality proposition

「メアリが真剣でない」「可能性がある」
 → メアリは真剣でないかもしれない。

b: Mary cannot be serious.

[It is not possible] [that Mary is serious.]
 modality proposition

「メアリが真剣である」「可能性がない」
 → メアリは真剣であるはずがない。

すなわち(26a)においては否定辞 not は助動詞 may の「可能性」の意味を否定しておらず、命題内容の方を否定している。一方(26b)においては、否定辞 not は命題内容を否定しておらず、助動詞 can の「可能性」の意味の方を否定しているのである。

またこの否定の作用域の違いと密接に関係していることであるが、may と can では助動詞と否定辞の縮約に関して異なった振る舞いをする。

(27)a: Mary may not be serious.

b: ×Mary mayn’t be serious.

(28)a: ×Mary can not be serious.

b: Mary cannot be serious.

c: Mary can't be serious.

(27b)が示すように、possibilityを表す may を用いた文では助動詞と否定辞を縮約することは出来ない⁽⁶⁾。(27a)が示すように助動詞と否定辞は必ず分離して書かなければならない。逆に、(28a)が示すように、possibilityを表す can を用いた文では助動詞と否定辞を分けて書くことは出来ない⁽⁷⁾。(28b)が示すように、助動詞と否定辞を一語として扱うか、(28c)のように縮約して書く必要がある。縮約に関する、may と can の振舞いの違いは(26)で検討した、否定辞の作用域の違いをそのまま反映していると言えよう。may not において否定辞 not は助動詞 may を否定しておらず、命題を否定しているので助動詞との縮約を許さない。一方 cannot においては否定辞 not は正に助動詞 can を否定しているので、両者の関係は密接となり、一語として扱ったり、助動詞と否定辞を縮約することが出来るが両者の関係が密接であるがゆえに分離して書くことは出来ない。両者の密接な関係を壊すことになるからである。このような縮約の振舞いの違いが両者における否定辞 not の作用域の違いを反映しているわけである。

3.3. 否定辞の作用域の違いについて: yet vs. already の場合

3.2.で見たように「モダリティ」と「命題」を分離することで否定辞の作用域を明確に視覚化できるわけであるが、同様の分析が not yet と not already にもあてはまるのではないだろうか。助動詞の分析と同様に not yet の文と not already の文を「真偽値 (true or false value)」と「命題 (proposition)」とに分離して、否定辞 not が何を否定しているか、すなわち否定辞の作用域を分析する。

(29)a: We could have lunch together if you haven't eaten yet.

[It is the case] [that you have not eaten yet.]

true or false value proposition

「まだ食べていないこと」「が真である」

→ まだ食べていないのであれば

b: We could have lunch together if you haven't already eaten.

[It is not the case] [that you have already eaten.]

true or false value proposition

「既に食べたこと」「が真でない」

→ 既に食べたのでなければ

「まだ食べてない」と言っても、「既に食べたのでない」と言っても結局「食べていないこと」に変わりはないが、“if you haven't eaten yet”には食べたのか食べないのかの判断が中立的であるのに対して“if you haven't eaten already”では、「たぶんもう食べたとは思いますが、でももしまだ食べていなければ」と言った、予見が入り込んでいると言えよう。すなわち、(29a)においては yet は not の作用域の中にあるので yet が否定されているが、

not already においては *already* は否定辞 *not* の作用域の中にないことがわかる。(29 b) において否定されているのは真偽値の方であって、*already* ではない。そのことが「既に～している」と言う予見の存在を確保しているのである。Bolinger は *not already* に関して次のような言及をしている。

(30) If there is a negative, as in *He's not eating already (already not eating)*, the negation is affirmed as a unit: *not eating = fasting*.⁽⁸⁾ As with *some*, the affirmativeness of *already* compels conducive negation in questions: *Aren't they here already? = They're here already, aren't they?*

Bolinger (1977: 35-36)

表現の仕方は異なっているけれども、*already* が否定の作用域の枠外にあると主張する点では拙論と同じ考えを述べたことになる。またここでも *some* と *already* の類似性が指摘されている。

以上の論考に基づいて個々の事例を検討してみる。網羅的に取り上げることは出来ないが、いくつかの例の分析を試みる。

(31) Tracy felt dazed as she stumbled outside. She wiped the back of her hand across her face, “Jaff, please let me call an ambulance. Nobody could have heard those shots. If she's not dead already, she'll die for sure if we just leave her here.”

Robinson (2010: 174)

Tracy は Jaff に銃で脅されて、「人間の盾」として無理やり行動を共に取らされている。この場面に先立って、Jaff は自首するよう促した女性刑事を拳銃で撃っている。弾は2発刑事の胸部に当たった、という記述がある。常識的には即死してもおかしくない状況である。その場に居合わせて事の一部始終を目の当たりにした Tracy の判断として *She is already dead*. という予見を持つことは至極当然である。したがって、死んでいる場合も死んでいない場合も両方が等しく可能性として存在する、「if she's not dead yet」という中立的で *open-ended* な表現よりはむしろ「既に死んでいるが真でないならば→すでに死んだのでなかったら *if she's not dead already*」と発想する方がより自然で、妥当と言えるであろう。

(32) “I don't want to be bleeding fair,” snapped Frost. “I'm trying to save the life of a missing schoolgirl, assuming the bastards haven't already done to her what they did to Debbie Clark—but she says there's not enough flaming evidence. Do we let a kid die just because there's not enough bleeding evidence?” (= (03))

Frost は警部(*inspector*)で連続少女誘拐殺人死体遺棄事件を担当している。

Debbie Clark という少女が誘拐され、その後遺棄された彼女の他殺死体が発見されていた。今また新たに別の少女が行方不明となった。しかし Frost はある有力な容疑者を見つけ出した。更なる捜査をするために、容疑者の家の家宅捜査令状を判事（女性）に請求したところ、証拠が不十分であることを理由にその判事は Frost の令状発行の要請を却下した。被害者にも容疑者にも fair でなければならない、というのが彼女の主張である。しかし Frost は納得できず、怒りに震えている場面である。Frost は Debbie の誘拐、殺人、死体遺棄という一連の流れをすでに経験している。同じことが行方不明の少女にもすでに起きているかもしれないとの予見を持つことは十分理解しうることである。したがって、“assuming the bastards haven’t done yet” という中立的、open-ended な表現よりも already を用いた表現の方が文脈によりふさわしいと考えられる。

(33) “Obviously, I don’t have the manpower to follow up every name in Roy’s life, the way you and DI Brooke do, so I plan to go straight to Lambert, when I can find the slippery bastard. It still surprises me that Brooke hasn’t been there already.”

Robinson (2005: 293)

(33) では Roy の他殺体がテムズ川を漂っているのが発見されてその後の捜査状況を述べている。Lambert は Roy の大学以来の友人でありかつビジネスパートナーでもある。また二人のビジネスにはかなり犯罪すれすれの際どいものも含まれていて Lambert はかなり怪しげな人物でもある。そのような重要参考人であるにもかかわらず主任捜査官の Brooke は Lambert のもとを現時点で訪ねてもいないし尋問も行っていなかった。「すでに訪ねて職務質問をしていてしかるべきだ」との予見が Banks にあっても当然である。そのことが already の使用となったのである。

3.4. not already の否定的ニュアンスについて⁽⁹⁾

『ジーニアス』において、not already の出現条件として、「if 節、関係節の中」などの統語的条件を挙げている。しかしながら多くの事例に接し考察した結果、not already の出現条件は統語的なものと言うよりも、むしろ意味論的、語用論的な側面があることが推測される。以下の例文を検討してみる。

(34) I did consider myself lucky. I had tried to keep a cool head all the time I was in Angelique’s parlor, but now I found that I was shaking. It was only just hitting me how close I had come to death or a fate worse than it. I was sorely tempted to give it all up and go back to the Lower East Side, where I felt safe. How could I possibly uncover any facts that the police hadn’t already uncovered? (=04)

(35) “Can we have the TV on?” she (=Tracy) asked.

“Why?”

“I want to see the news. They might say something about...you know.”

“They can't tell us anything we don't already know,” said Jaff. “Are you hungry? Shall I call room service? What do you fancy?”

Robinson (2010: 295)

(36) “Still you won't be wanting to hear an old man's reminiscences, will you?” he said, winking at Annie. “You'll be wanting to know what it was I saw.”

“That's why we're here, Mr. Seaton,” said Brooke.

“Alf, please.”

Alf was a name you didn't hear much these days, Annie thought, and if you did you could guarantee it belonged to someone of Mr. Seaton's generation.

“Alf, then.”

“I'm not sure I can tell you anything I didn't already tell the uniformed bloke.

“Let's start with what you were doing.”

(37) Robinson (2005: 229)

(34)-(36)では not already に先行する文が全て否定文ないしは否定語句となっている(波線部分)。(34)は一見疑問文となっているが、これは明らかに修辞疑問文であって、この How could I possibly uncover は I could not possibly uncover と同じであり、実質的には否定文と見なしうるものである。今(35)を例にとって検討する。これは(31)の続きである。Tracy は Jaff に撃たれた女性刑事のその後のことが知りたくてテレビをつけてくれるように Jaff に頼む。それに対して Jaff の答えは、“They can't tell us anything we don't already know” である。この意味することはおおむね次のようなことである。「我々にとって既知であること(すなわち、例の女性刑事が死んでいること)でないようなことをニュースは言わない」ここには、「どうせもうあの女性刑事は死んでいるのだから、テレビをつけても無駄だ、ニュースが新たな情報を提供するわけではない、ニュースを見ても意味がない」等の含意(implicature)が存在すると言えるであろう。(36)でも同様のことが言いうる。ここでは、初めに制服警官から職務質問を受けた人物が今度は制服警官より上位の事件担当の警部に改めて職務質問をされる場面である。件の人物は、「制服警官に既に話したこと以上/以外のことを言うことができるかわからない」と答えている。ここにも、「質問しても無駄だ。」「更に新しいことは話せない」等と言った、否定的な含意が存在している。このようなことから、not already は if 節内、関係節の中と言った統語的要請よりもむしろ何らかの否定的な含意がある文脈と言った意味的要請から使用されると考えられる。これは(30)で Bolinger も主張しているように、already が否定域の枠外にあることから説明がつく。(31)で見たように女性刑事が撃たれるのを目の当たりにした Tracy には、She is already dead という予見があり、それが既定のこととして意識される。既定のこととはもはや変更不可能なことがら、今更どうしようもないことがらである。したがって、“If she is not dead” はいわば例外的な事柄なのである。「死んでいるのでなかったら」と

いう仮定は発言者本人も自分の発言の可能性を信じていないで発言していることになる。そのことが *not already* の否定的な含意を生み出していると言えよう。

4. 結論

not yet と異なり *not already* には「予見」が入り込んでいることは従来より言われてきた。疑問文の場合、*Have you met Professor Hawkins yet?* には *yes* と答えることも *no* と答えることも出来る。主語の人物が *Professor Hawkins* に会ったことがあるのか、ないのかどちらの可能性もあるとの中立的、*open ended* な立場で質問しているからである。一方 *Have you already met Professor Hawkins?* には「すでに会っているはずだ」との予見が存在している。いわば、*yes* の返答を予測した質問となっている。しかしながら、なぜ *already* に「予見」が入り込むのかを明らかにした論考は管見によればなかった。この *yet* と *already* の予見の有無の相違は *not* の作用域の相違から生まれるものである。すなわち *yet* は否定辞 *not* の作用域の中にあり、したがって *if you haven't eaten yet* では「まだ食べていない」「が真である」と分析できるように、命題の方が否定されている。一方 *if you haven't eaten already* では「すでに食べた」「が真でない」と分析できて、否定されているのは命題ではなく真偽値の方である。端的に言って、*not yet* では *not* は *yet* を否定しているのに対して *not already* では *not* は *already* を否定しておらず、真偽値の方を否定している。*already* は否定の枠外にあることは、*Bolinger* も主張していることである（引用(30)参照）。この、*already* が否定されていないということから「予見」が生まれるのである。このように *not yet/already* を含む文を真偽値と命題に分けて、否定辞の作用域が異なることを明らかにしたところに拙論のオリジナリティがあると考えている。また *not already* は何らかの否定的な含意（～しても無駄だ、意味がない等）が前提として存在するような場合に用いられるという指摘も拙論が初めてであると考えている。

註

- (1) 拙論は 2012 年 10 月 6 日に大阪商業大学（東大阪市）で行われて日本英語コミュニケーション学会第 21 回年次大会での口頭発表「否定辞の作用域に関する一考察：“*not already*”について」を改題し、加筆修正を加えたものである。当日司会の労をお取りいただいた関西大学の奥田隆一先生および、様々な質問やコメントをお寄せいただいたフロアの方々に感謝申し上げる。
- (2) 本論考において辞書等の略号は以下の通りとする。
 - 『ジーニアス英和大辞典』（電子版）→『ジーニアス』
 - 『新英和大辞典第 6 版』（電子版）→『新英和』
 - 『オーレックス英和辞典』（電子版）→『オーレックス』
 - 『ランダムハウス英和大辞典』（電子版）→『ランダムハウス』
 - A Comprehensive Grammar of the English Language* → *CGEL*
 - Cambridge Grammar of English* → *CGE*
 - The Grammar Book: An ESL/EFL Teacher's Course: 2nd Edition.* → *GB*
- (3) 「×」は当該の文が文法的、意味的等で不適格であることを意味することとする。
- (4) 単に否定を強調するために主に非標準の英語で用いられる二重否定や多重否定構文は

拙論では扱わない。

- (5) 複数の文献に当たり、それぞれ疑問文と共起した *already* に関する言及があったが、本文中に逐一挙げるのは煩瑣に過ぎるため、代表的なものにとどめ、残りを以下に記す。

- (a) Have you already seen him? [expecting that you have or implying that you have done so earlier than expected]

CGEL (1985: 580)

- (b) Haven't you seen him already? ['Surely you have seen him by now?']

CGEL (1985: 580)

- (c) Have you booked a flight already?

(You've done it so soon, have you? It seems very early to book.)

Have you booked a flight yet?

(We know you have to book one, but I have no idea if you have done it up to this point in time.)

CGE (2006: 40)

- (d) Questions with *already* often suggest that something has happened. Compare:

Have you met Professor Hawkins *yet*?

(=I don't know whether you've met him.)

Have you *already* met Professor Hawkins?

(=I think you've probably met him.)

Is my coat dry *yet*?

Is my coat dry *already*. That was quick!

Swan (2005: 558)

- (6) 「*mayn't* は<主に英>だが<まれ>」『ジーニアス』

「この意味（推量・可能性）では短縮形 *mayn't* は用いられない」『ランダムハウス』
『ジーニアス』に記述のある *mayn't* も「許可(permission)」の意味で用いられた場合に限られるのであって拙論で扱う「可能性(possibility)」の意味の *may* とはおのずと振る舞いが異なる。

なお、拙論はあくまでも「現代」英語における *may* についてのみ扱うこととし、その歴史的な来歴、統語的特徴の変遷等の側面には触れないこととする。

- (7) 「*can not* は強調、対比、修辞その他特別な場合を除いて用いられない」『ジーニアス』

「*not* に強勢を置く場合には *can not* も用いる」『新英和』

「*not* の強調のため *can not* と 2 語に分けて書かれることもあるが、*cannot* の方が一般的」『オーレックス』

辞書により種々の言い方はあるが、*can not* は特殊な場合のみ可能として、一般的な用法としては *unacceptable* と判断した。

- (8) この *fasting* は「絶食 (= 食べないこと)」の意味である。

- (9) 口頭発表の折に関西大学の奥田隆一先生から、否定辞と *already* の共起条件として『ジーニアス』よる「*if* 節内」「関係詞節内」などの統語的な分類がはたして妥当であるかどうか疑問である。たとえば、関係節内で用いられた例文を観察すると、当該構文に先行する

文がいずれも否定文であった。したがって、「if 節内」「関係詞節内」などと言った統語上の条件と言うよりも、何らかの意味的要請があって、当該構文が用いられている可能性があると考えられる、との貴重な指摘を受けた。拙論は奥田先生のご指摘に負うところが大きい。ここに明記して奥田先生への謝意とする。

参考文献

- 加藤泰彦、他（編）2010『否定と言語理論』開拓社
 久野暉・高見健一 2007『謎解きの英文法否定』くろしお出版
 小西友七、他（編）1993『ランダムハウス英和大辞典』小学館
 小西友七、南出康世（編）2001『ジーニアス英和大辞典』大修館書店（電子版）
 竹林滋、他（編）2002『新英和大辞典第6版』研究社
 野村恵造、他（編）2013『オーレックス英和辞典第2版』
 宮川幸久、他（編）2010『アルファ英文法』研究社
 Bolinger, Dwight. 1977. *Meaning and Form*. Longman.
 Bowen, Rhys. 2001. *Murphy's Law*. Minotaur Books.
 Carter, Ronald & Michael McCarthy. 2006. *Cambridge Grammar of English: A Comprehensive Guide Spoken and Written English Grammar and Usage*. Cambridge University Press.
 Celce-Murcia, Marianne & Diane Larsen-Freeman (with Howard Williams). 1999. *The Grammar Book: An ESL/EFL Teacher's Course: 2nd Edition*. Heinle & Heinle.
 Grice, H. P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Harvard University Press.
 Leech, Geoffrey & Svartvik, Jan. 2002. *A Communicative Grammar of English. 3rd Edition*. Longman.
 Quirk, Randolph et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
 Robinson, Peter. 1994. *Final Account*. Avon Books.
 Robinson, Peter. 2005. *Strange Affair*. Avon Books.
 Robinson, Peter. 2010. *Bad Boy*. Harper.
 Swan, Michael. 2005. *Practical English Usage: 3rd Edition*. Oxford University Press.
 Wingfield, R. D. 2008. *A Killing Frost*. Corgi Books.

著者の E-mail address: jimmyriddle1066@yahoo.co.jp